

3 / 29 『救われるべき者たち』 (マルコ 15 : 22 ~ 34)

長谷川 望牧師

- * キリスト教会には必ず十字架がある。キリスト教のシンボルである。しかし、十字架を見る時、あなたは何をイメージするだろうか
- * 大祭司カヤパの所からローマ総督ポンテオ・ピラトに引き渡されるイエス。ピラトはイエスが何も死罪にあたるようなことをしていないのでためらうが、群衆を恐れて結局十字架につけるようにと引き渡した。イエスは鞭打たれ、さんざんもてあそばれた後、いばらの冠をかぶせられ、自ら十字架を背負ってゴルゴタの丘まで進む。この約1キロメートルの道をイエスの苦しみを覚えるため「ヴィア・ドロローサ (嘆きの道)」と呼んでいる。
- * 道行く人たちは「**十字架から降りて来て、自分を救って見ろ**」(15 : 30) とののしり、祭司長たちや律法学者たちやイエスの両側に十字架につけられていた二人の重罪人(後に一人は回心してイエスからパラダイスを約束される)もあざけた。「**他人は救ったが自分は救えない。キリスト、イスラエルの王さま。今十字架から降りてもらおうか。われわれはそれを見たら信じるから。**」(15 : 31 ~ 32)
- * イエスは朝9時に十字架につけられ、午後3時まで苦しんで息を引き取られた。「**イエスは『エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ』と叫ばれた。それは訳すと『わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか』という意味である。**」(15 : 34) これは、イエスが人として生まれた人間的な叫びであり、イエスが神であると同時に人であったことを示す証拠でもあると思う。イエスは苦しみを受けて十字架につけられて死ぬことをご自分で預言されていた。ご自分が犠牲になって、人の魂を救うという父なる神のみこころを前から知っておられた。
- * 「**十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。**」(1コリント 1 : 18) 十字架とは何であるか、十字架をどのように見ているか、と私たちは問われている。聖書の十字架物語には多くの人々が関わっている。ローマ兵士や異邦人や群衆にとっては、十字架は重罪人の象徴。また、イエスの存在が自分たちにとって都合が悪かったユダヤ人にとって、十字架は神から呪われた者。彼らにとって十字架は愚かなしるしでしかなかった。しかし、彼らこそ十字架が必要な者であった。そして、私たちも同じである。救いが必要であると認識している者やすでにイエスの十字架を信じて救われている者にとっては、十字架は「救い」のしるしである。そして、十字架の向こうには、「希望」「いのち」が見える。死の後、三日目によみがえられたからである。死刑の恐ろしい道具が「神の愛」のシンボルになったのである。十字架を「誇り」として生きたい。